

ガイドライン案（第二稿）確認後の意見等

意見・感想

- 今回の特徴として「望ましい態度・認知」「望ましいノンテクニカルスキル」を設定して体系化したことだと思いますので、そこはしっかりと伝わるように強調した方が良いと思う。
- 丁寧に良く作りこまれている。
- 内容にあっては理解できると思われる。
- 小規模消防本部では、救助隊長だけではなく、兼務でいろいろな役職についている職員もいると思うので難しい部分もあると思われる。
- 読んで理解はできますが、理想と現実があり、一自治体として、ここまでの素晴らしい人材を育成できる、また近づけるかは厳しいと感じる。この理想像から、プレッシャーも感じ悲観的になる隊長が出てくる。
- ガイドラインが理想的な救助隊長像ということで、若手の救助隊員がこの資料を目にしたときに、このような救助隊長像を目指していこうとなるよりも先に、自分の隊の救助隊長と照らし合わせしまい、隊長への不信感を抱いてしまう。
- 特別高度救助隊などは、特に有すべき専門的な知識・スキルという部分では自分は数段階上にいる、関係ないと感じてしまうのではないかと危惧する。
- 現役の救助隊長が見た場合に、隊長のレベルが低めに設定されていると感じないか？
- 十分に理解できる内容と思います。分量が少し多いように感じますが、カテゴリに分かれていますので、場面に応じて有効に活用できると思う。
- かなりの長文ではありますが、時間を掛けて把握していけば理想とする救助隊長に繋がると思います。チェック項目から自分を分析し把握することで、見えない自分が見えてくるが、あとは、自分がどれだけ向上心を持って、真摯に向き合っていくことができるかだとは思う。
- 総括表について「望ましい態度 ← 心がけていきたい態度」「望ましいノンテクニカルスキル ← 高めていきたいノンテクニカルスキル」のほうがよいと思う。
- ガイドラインについて、丁寧に作成されていると思うが、逆に文章的（解説的）には全体にくどすぎるように感じる。（読者次第、というところはあると思う）。また訓練指導マニュアルとの対応や、重複記述も調整する必要がある。（このガイドライン自体がマニュアルになっているようにも感じた）
- このガイドラインは何日かかけないと読めないものと思うので、最後のころになると、最初の事項を忘れてしまうと思う。そこで、各事項解説の最後に、「自分は心掛けているか評価しましょう」（◎○△×）などを評価する欄を作っておき、都度、自身を振り返らせるなどの工夫をするとよい。
- 「ですます調」と「だ・ある調」が混在している。
- 第1章 【ガイドラインの活用にあたっての注意事項】

もっと、「このガイドラインは本当にいいものだ！」というような表現であれば、読み手も「読み進めてみようかな」となると思う。(①、③のようなネガティブな表現の注意事項が冒頭に来ると、逃げ口上のように見え、読み手の気持ちを挫きそうです。このガイドラインに懸ける消防庁の「覚悟」を訴えて欲しいと思う。)

○第3章 1 理想的な救助隊長としてのマインド (意識)

内容が「自分のこと」と「部下のこと」のみとなっており、「上司のこと」に対する記述がないので、「救助隊長は、組織活動における救助の専門家としてのフォロワー」という意識に関する内容も加えられたらよい。どうしても職人気質が強くなると、自分のやりたいようにやる隊長も多くなるので、上司の補佐、という意識は必要だと思う。なお、「2 現場における理想的な救助隊長像」の③及び④に現場指揮者に対する支援に関する記述もあるため、意識面にフォロワーシップの内容があることで、全体としての整合も図れるものと思う。

○P 1の3つ目のチョコボ内文言検討

「初動対応、戦術等・・・。」戦術というより、「活動方法」などの方がいいのでは？(各本部からの意見であれば問題ないですが・・・。検討を)

○P 7「1 理想的な救助隊長としてのマインド (意識)」やや自己犠牲的な印象を持ちますが、救助隊長から共感を得られる内容になっているのでしょうか。救助隊長が、この職が好きで楽しむことができる、という要素は必要ないでしょうか。

○P 7「2 現場における理想的な救助隊長像」どちらかというより理想的というより標準的な救助隊長像に読めますが、隊員の意見をよく聞く、いざというとき断固とした態度がとれる、などが「理想」では？

○P 8「3 訓練指導における理想的な救助隊長像」理想というより標準的な救助隊長像に読めます。隊員がモチベーション高く訓練できるような環境を作る、などが「理想」では？

○P 9「1 理想的な救助隊長像総括表」と「2 理想的な救助隊長像に近づくための4つの要素」の間に、「3つの総括表」を挿入するようになっているが、「2 理想的な救助隊長像に近づくための4つの要素」の後に、表を入れた方がよいのでは？

○P10④望ましいノンテクニカルスキル中、下から10行目「現場においては、現場管理能力としてのリーダーシップ、指揮命令系統に関するコミュニケーション能力(わかりやすい説明)、要救助者の負担軽減のための接遇(声かけ・励まし)、隊員の安全管理のための先見力・観察力、災害後の建設的な振り返りのための心理的安全性・傾聴力などを示している」と総括表の記載事項を列記していると思われるが、総括表に列記している順番と違うところがあり、総括表と対比しながら見ると違和感を感じる。

→ 事務局にて、総括表の並び順を入れ替えガイドラインの本文の順番と整合させました。

○P11に「3 ガイドラインの活用方法」中に、「(1) 個人による活用 ア セルフチェック」では、活用方法について記されているが、一目でチェックする点がわかるような「チェックシート (雛形)」を作成して示す必要があるのではないかと感じた。(総括表を参考に、各消防本部で作成してもらうという考えもあるが・・・。)

○P11 最上段の「第三者のヒアリングによる総合的評価」やP11の「セルフチェ

- ック」などでチェックリストみたいなものは作成するようになっていたか？
- P13 の中段の【趣旨・ポイント】のなかに「しかし、すべての面において隊員より優れている必要はなく、カリスマ性も不要です。」との記載がある。後段を読んでいくと理解できるが、すべての面において優れていても良いし、カリスマ性も持ち合わせていたら、この上ないことと思う。一方で、そういった面があっても、隊員とともに自分も成長しようとする「マインド」が必要だという意図だと思うため、「必要ない。不要」と断定せずに、言い回しをソフトにした方が良くと思う。
 - P13 の【趣旨・ポイント】の3行目「カリスマ性も不要」とありますが、あってもいいと思うので「カリスマ性は必ずしも必要ではない」としては？
 - P15 上から5行目「隊員に過度に規律を求めてしまう・・・」の「過度に」はなくてもいいのでは？（強調しすぎでは）
 - P19 (7) 隊員の、自律性を高めることができる。の本文上から7行目「R1やR2」とは何か？
 - P25 (2) 6行目～7行目の下線の意味が分からない。（リーダーシップとフォロワーシップは違うのでは？）
 - P29 本文上から2行目、「第4章1(2)「到達目標の詳細」を紐付けた」とあるが、第4章1(2)は存在しない。（第7章の本文内も同じ）
→ 事務局にて修正しました。
 - P30 「(4) 現場指揮者による救助活動方針と決定した救助方法に基づき・・・指示下命ができる。」の【趣旨・ポイント】の内容は、要救助者への配慮的な内容になっており、どちらかといえば、(5)の到達目標への内容と思われるので、修正が必要と思われる。
 - P31 「到達目標(7)」の【趣旨・ポイント】上から5行目「やじうま排除等における消防団との連携」について、やじうま等の排除に関しては、トラブル防止の観点から警察の協力も必要であると思いますので、「消防警戒区域の設定（やじうま排除等）における消防団との連携」としては？（消防法）
 - P31 「到達目標(7)」の【身につける・改善するためのヒントや参考事例】の整理の仕方として、ヒントを先に、続いて参考事例としては？
(案) 3つ目「これまで経験したことのない事案や・・・」と6つ目(P32)「また、活動後の関係機関との連携も・・・」を最初に、以降順番に並べる。
 - P38 の(2)の【趣旨・ポイント】の2段落目。「覚悟」という語が適切かどうか。やや違和感がある。
 - P40 「到達目標(3)」の【留意事項】1つ目「過度な上下関係だけではなく、指導者の指示・指揮に従い、なおかつ遠慮なく必要具申ができる環境づくりに・・・」を、P26 第5章5-3(2)(ウ)を引用し、「権威勾配(階級や役割、責任、経験等において高低差が生じること)をなくし、指揮者の指示・指揮に従い、なおかつ躊躇なく意見具申できる環境作りに・・・」としては？

今後の活用方法

- レビューシートを作り、日々の活動、訓練を評価させる。
- ガイドライン内の活用法に記載があるとおり、個人でも組織としても有効に活用できるように「セルフチェック表」のような様式を作成し、客観的に自分自身を見直すことができるようなシンプルなツールがあると良いと思う。
- モデル場面についてのビデオを作り、それを視聴してもらい、評価してもらうなど、いずれにせよ、読み物としてではなく、実際の活動をこのガイドラインを使って評価させる取り組みがなされるとよい。
- 第1章【ガイドラインの活用にあたっての注意事項】の①及び③で謳っている内容を逆に行えば、活用が促進されるものと思う。
- ガイドラインの活用については、消防大学救助科での活用が有効であると思われる。
- 各都道府県消防学校救助科での活用も良いと思われるが、教官となる職員が、救助隊長経験があり、かつ、消防大学教官科でこのガイドラインを活用した研修を受けた者が講義できるものとした方が、指導の方向性が統一できると思われる。
- 消防大学校の救助科の講義が有効であり、特に小・中規模の消防本部においては、救助隊長の考えや方向性が顕著に表れてきてしまうため、救助隊長としてあるべき姿が見出すことができ、有効であると思われる。しかし、年間2回の救助科で120名しか受講できないのでは全国の消防本部に浸透するまで時間を要するため、ZOOMを用いた研修を受講できれば良いのではないかと思います。
- 各消防本部の研修実施時にこのガイドラインを有効に活用してもらおうと良いし、ガイドラインの存在を周知するだけでも前進かと思う。
- 消防大学校や県消防学校において、ガイドラインを活用した「救助隊長コース」を新設する。（特別高度・高度救助隊長コースでは、中小規模の消防が受講できないため）
- ある程度の冊子にはなると思いますが、書籍であれば購入希望者も多くいるのではないかと思います。
- 書籍として全国の救助隊長に頒布することも一考する余地があると思う。
- 隊員の指導計画等の作成例など活用例を紹介する。（ガイドラインを参考に各隊員の現在の姿、今後の到達目標やねらいを隊長と隊員が作成・共有し、目標達成の方法を見出し実践する。（「行動が変わる」が見える化に活用）
→ 別紙参照
- 救助隊長のみならず、消防隊長や救急隊長にも該当する部分があるので、幅広く活用することが重要。
- 救助隊長にクローズアップした内容なので、各隊長（他救急隊隊長・消防隊隊長）の理想像としても良いのではないかと思いますと思われる。
- 救助技術高度化検討会のため、救助隊長に焦点が当てられているが、救助隊長のみならず、消防隊の小隊長や中隊長にも置き換えることができる良いものだと思う。